

高
尚
居士

のやうに人老ハ東國ふこ乃老

あつはま神はをと我小のほわ

がなこゝ那こを一見仕る人み

が日月清水ハ糸リや電存

松をまへに那様木ノ發明了

花に静おは流り那ま浮世乃

以が貴事電定ぬ露木猶ふとん

是ハ先師自死居之の信衆無縁
 乃勿力哉も修之波——新ひ
 橋なもいふとみり横はし——廿
 あり 里上 楓く 東岸西岸居之可づ 詩
 里ハ河くつり成人の父母哉離
 神ハ信出家うや 三詩 む修——老
 りを司新ふや本より来信所も

なみきき出家とつふ——美謂も
 那——出家小あり然もの久をも
 ぞ——い衣を墨子染もさそいだ
 を落つ——つた入り入る 早 善を
早 三々も 早 急まの 早 智を捨るも
 遇 早 小少神 早 あり 早
 波 里 了 白 川 也 早 橋 早

まうきくあゆ成心の仏乃
をもぞく箇く孫を孫さけくに
くよ能せぬ徳もる屋 但正徳
既く神了末法子生哉りきうわ
下月、
うるり存之に表る様末様とも
なま久う歳冬虫離乃乃 花を
惜見月哉ううも歌呈やひ貴ハ

高き也 鼎隣北山 友の徳と
たぐく燃燈乃意あつう 一 佛
の徳のわりもさういふ 一生の
海中は路通よ 空の入波あう
くまぬ乃月屋 一 一 一 一
愛心に任とて 吾母くあひ
交金初死小悔了 小志ころ了

